

# 岐阜県における騒音性難聴に関する研究

主任研究者	岐阜産業保健推進センター相談員	岩田 弘 敏
共同研究者	岐阜産業保健推進センター相談員	井奈波 良一
	三菱電機中津川製作所診療所長	藤田 節 也
	神岡鉱業・鉱山病院長	高田 晴 子
	川崎重工業・保健診療所長	飯田 忠 男

## 1. はじめに

金属鉱山での坑内で雇用後10年以上就労している、さく岩夫の聴力を経済的に分析し、坑内騒音は著しいが、騒音管理が十分なされているにもかかわらず、どの程度聴力低下が生じるのか、そして、その対応を如何にするか検討した。

## 2. 対策と方法

金属鉱山のさく岩夫のうち、雇用後10年以上聴力管理がなされている32人分のカルテから、就労時、10年時、15年時、20年時に分類し、周波数ごとに集計した。10年時までは32人であったが、その後、15年時は22人、20年時は20人となった。

一方、参考のために家庭電気器具製作所の騒音職場での従業員の聴力を検討しようとしたが、対象が少なく、騒音職場には就労時9人、その後10年以上管理されていたのは5人のみであった。

## 3. 結果

さく岩夫の聴力を左右の耳に分けて、就労時、10年後、15年後、20年後の平均値をみると、左右耳ほとんど類似しており、就労時にはどの周波数でも15dB以内の聴力低下であったが、10年後には4kHzおよび8kHzで聴力(いき)値が20dBに達していた。15年後には明らかなC5dipがみられた。そして1kHzおよび2kHzでも20dB以上の(いき)値となり、0.25kHzも20dB以上になっていた。20年以上たつと4kHz、8kHz、ともに40dBに近い聴力(いき)値を示した。

家庭電気器具製作所での就労者については就労時および5年後では左右どの周波数でも10dB内の低下であったが、10年後には聴力が大きく低下した者が出現した。さく岩夫の15年後に匹敵した。

## 4. 考察

坑内での騒音対策はかなり難しい。聴力管理としては防音保護具の着用の徹底と暴露時間の短縮である。85dB(A)以上の騒音職場に就労する場合、耳栓着用を徹底していても10年までの聴力管理とそれ以上就労している場合の聴力管理とは暴露時間の制限などを加味したものにする必要がある。例えば、10~15年までは1日5時間以内、15~20年までは1に津3時間以内というように時間管理をすることが騒音性難聴予防に有効ではないかと考える。85dB(A)前後の騒音職場でも就労15年以上者には騒音のない職場転換か暴露時間1日3時間以内にする必要がある。